

「よいか、豆にコツコツ頑張れば、いつか必ず大成する。頑張りなされや」とお釈迦様が仰ったので「豆」という本を書く事にした。しかしよくよく調べてみるとこの場合の「まめ」とは「忠実、勤勉、誠実」という意味らしく、食べる豆とは関係ないらしい。もしかしたら大豆のように、小さいが育てばもやしになり枝豆になり、煎ったら鬼にも投げられるし茹でれば豆腐になるし腐れば納豆になるし味噌にも醤油にもなることから「小さな物でも必ず大きく育つ」という意味なのですね？と枕元に聞いてみたがお釈迦様はもう二度と現れてくれなんだ。間違えた事を恥じているのかはたまた本当にあれはお釈迦様だったのか…わからないがマメに続きを書く事にした。

～公演チラシより～

引っ越しをしたのです。今まで住んでいたアパートより三倍広く、家賃は倍になりました。芸人はよく身の丈以上の住居に住むと売れると言いますが、そのジグクスにあやかろうと言う訳です。そんな事を考えていたら近所の神様に、「バカか、あれは実際に売れた人が言っているだけでほとんどの芸人は売れずに終わって借金だけが残し、また元のポロアパートに戻っている。表舞台から姿を消した人たちの声は届いてこないという訳じゃ」なんて夢も希望もない事を平気で言われた。僕は最近「この世界で働くこと」について考えている訳ですが、今回もそんなお芝居です。夢も希望もないんだからせめて笑いだけでも…と試してみただけそう上手くはいかないみたいです。

～公演パンフレットより～

『豆』

平塚 直隆

登場人物 僕・鬼頭洋一
星野
山本ユウキ
部長
佐伯かなこ
隣の奥さん・岩永
山本の彼女・みほ
吉田さとし

僕の家は1Kのマンション。
三畳くらいの洋室に、ベッドと小さなテーブル、本棚が一つある。
奥には一畳程度のキッチンがある。

夜、友人を連れて帰って来た。
友人はコンビニで買った缶ビールをビニール袋に提げている。

僕 本当に、本当に小さな部屋なんだ。何も無いし何も面白くない。
星野 いいかい、鬼頭君。僕はね、世の中になんにも面白くないことはないと思っているんだ。久しぶりに会えた

んだよ、これだけで充分面白いじゃないか。
僕 テレビも無いんだ…。
星野 いいかい鬼頭君。僕はね、テレビが面白いなんてこれっぽっちも思っていない。僕らは話をするんだ、これからの日本の話をね。
僕 そんな大きなテーマで話せる自信無いよ…、
星野 こっちかい？

僕、立ち止まる。

星野 あ、ここかい？
僕 うん…。
星野 キレイなマンションじゃないか。
僕 本当に狭いんだ、三畳のワンケーだから。
星野 僕の家は、もっと狭いんだよ。
僕 え？ワンルームって事？
星野 さあ入ろう、立ち話もなんだ。
僕 散らかってるだろうな…。

僕と星野、部屋に入る。

僕 ほら散らかってる…。
星野 ひとり暮らしには十分な広さだ。

僕、床に置きっぱなしの洗濯物などを隅に固める。

僕 どこに座ればいいかな…。
星野 好きに座ればいいさ。僕も好きな所に座る。お邪魔します。
僕 コップも一個しか無いし…、
星野 このままでいいよ。そっちは台所かい？
僕 あ、うん。冷蔵庫が備え付けで置いてあって、ユニットバス。
星野 これで家賃が？
僕 四万五千。
星野 なるほど。

僕、小皿につまみを出して持って来る。

僕 場所がいいから…。
星野 じゃあ乾杯。
僕 …乾杯。
星野 僕等の再会に。
僕 明日、早いんだ。
星野 日曜日じゃないのかい？
僕 仕事なんだ。
星野 忙しいんだな。
僕 そうなんだ、この前休みを貰ったのはいつだったのかも覚えてないんだ。
星野 最近はどこも一緒さ(部屋を見回す)。
僕 散らかってるけど、汚くはないんだよ。全部洗濯したやつだから。
星野 洗濯機は、外かい？
僕 ベランダがある。

星野、洗濯物をたたみ出す。

僕 あ、いいよ。
星野 僕はこう見えて、几帳面なんだ。さっきの店だって、しょっちゅうテーブルを拭いてたろ。あれ無意識でやっちゃうんだ。
僕 そうなんだ…。

星野 潔癖症じゃあないんだよ、きれい好きただけなんだ。
僕 うん。
星野 誤解しないでくれ給えよ。
僕 うん。

僕、つまみをつまんで食べた。

星野 …。
僕 僕は洗濯物をたたむのが苦手だね、君は上手にたたむ。
星野 それは、ピーナッツかい？
僕 なんだろう、何かの種かな。どうぞ。
星野 種？
僕 うん、種だ。
星野 君は、なんだかわからない種を食べているのか？
僕 貰い物だから、よくわからないよ。
星野 ピーナッツは、あれはなんだ？
僕 落花生だろ。
星野 あれは種じゃないだろうな。
僕 うん、種じゃあないとは思うけど、よくわからない僕には。
星野 僕はね、種と豆の違いがよくわからないんだ。
僕 僕もわからないよ、種と豆の違いなんて考えた事もない。
星野 じゃあこうしよう、食べられる種の事を豆という事にしよう。
僕 大豆は、あれは種かい？
星野 種だろうさ。だってあいつから芽が出るんだろ。種だろう。枝豆だって、植えたら枝豆が生えるんだろうさ。
僕 じゃあ枝豆を食べずに植えたら、その何倍も枝豆が食べられるのかい？
星野 そういう事なんだ。
僕 君は賢いな、そんな事考えた事も無かった。
星野 人生はね、効率よく生きなくちゃあダメだよ。
僕 僕は、枝豆がほんとに好きだね…。
星野 君もか。
僕 君もかい？
星野 ははは。
僕 だけど、袋からいちいち一粒一粒取り出すのが面倒だね、誰かあれを剥いた状態で出してくれないものだろうか。
星野 君はあれを袋と呼ぶのか。
僕 だって袋だろ。
星野 じゃあカニも面倒臭いかい？
僕 そうなんだ、同じ理由さ。
星野 君は相当な面倒臭がり屋だ。
僕 袋から出された状態の枝豆を、どんぶり一杯レンゲで食べたいんだ。
星野 情緒もへったくれもないじゃないかそりゃあ。
僕 熱々の枝豆に、しょうゆとバターを乗せて食べるんだ、旨いんだ、きっと。
星野 やったらいいじゃないか、僕が剥いてあげるよ。
僕 いいよ、それは夢だから。死ぬ前に食べるんだ。
星野 いいかい、死ぬ前にそんな食欲はない。食べたい時に食べておかなくちゃ。
僕 そうだね、じゃあいつか、どうしようもなく暇な時に、枝豆をひたすら剥くでしょう…。

僕、静かにビールを飲む。

星野 …君はなんだか、疲れている。
僕 ちょっと酔っ払ってしまった。
星野 ちゃんと休まないとダメだよ。
僕 休みが無いって言ってるだろ。それなのにちっともお金が貯まらないんだ。年金が高すぎるんだ。僕はこんな苦勞を子供達にはさせたくない。だから子供はたくさん作るよ。たくさん作る。そう思ってもう三十五になっちゃったがね。僕はね、お年寄りの為に働くのは良いんだ、だが僕の事は誰が養ってくれるんだい。
星野 今日の同窓会で、気になる子は居なかったのかい？

僕 もうみんなおばちゃんだぜ、気持ち悪い。顔も名前も覚えてないよ。僕は高校生の頃、女子生徒と一言も言葉交わした事が無かった。卒業式の日、女子生徒が二人僕の背後で「あれ？こんな子居たっけ？」って話してた声は一生忘れないよ。

星野 (洗濯物をたたみ終え)どこに仕舞えばいい？

僕 (受け取り)ありがとう。

僕、ベッドの下に潜り込ませる。

星野 そんなところに仕舞うと、ホコリがつくんじゃないかい？

僕 さっきも言ったが汚くはないんだ、散らかってるだけで。

星野 そんな君が同窓会、良く来てくれたね。

僕 会費がタダだったからさ。じゃなかったら絶対行かない。飲み会なんてたいてい満足にご飯食べられないんだ。三千円も払って、結局ビール一杯と枝豆だけなんてお札をドブに捨てるようなもんさ。

星野 先生が払ってくれたらしいよ。

僕 それも年金だろあのじい！だったら現金で返してくれた方がよっぽどいいよ！

僕、ビールを一息で飲んだ。

星野 君はほとんど休みが無いと言ってたね。

僕 そうだよ、毎日毎日働きづめだよ。

星野 何時に家を出るんだい？

僕 朝七時。もうそろそろ寝なきゃ。明日は面倒な仕事だ。

星野 帰りは？

僕 たいてい七時を過ぎた頃かな。

星野 じゃあ僕と全く反対じゃないか。

僕 そうなのかい？

星野 僕は夜の仕事なんだ。昼間はたいてい寝てる。

僕 今日は？

星野 久しぶりに休みを貰った。こういう事がない限り休みを貰おうなんて思わないから。

僕 そうか、そういう考え方もあるのか。

星野 じゃあ昼の間は、ここは空き家なんだね。

僕 空き家じゃあないよ、留守にしているだけだから。

星野 でももったいないじゃないか、誰も居ないのに家賃は払ってるんだろ？

僕 …まあね。

星野 使っていないのに。

僕 そうだね。

星野 よしこうしよう、昼間の時間は、僕がこの部屋を貸りようじゃないか。

僕 …え？

星野 これで君の家賃は半分で済む。もちろん光熱費も半分さ。僕は朝七時頃、ちょうど君が出掛けた頃に帰って来て君が帰ってくる頃には出掛ける。もともと寝るだけだから持ち物は服くらいさ。何か邪魔になるような物は置かないと約束しよう。テレビも見ないしね。どうかな。

僕 …それは、一緒に住むって事かい？

星野 お互いの生活の時間が違うんだから顔を合わせる事はない。一人で暮らしているのと何も変わらない。君は毎日いつも通り働くだけで、家賃が半額になるんだ。

僕 …おい、それは、なんだかとても良いことのように聞こえるよ？

星野 君はどうせ夜中に洗濯して夜中に取り込んでるんだろ。僕が居れば、昼間に洗濯して昼間に取り込んでやる。

僕 …君は、きれい好きだからな。

星野 いいかい人生はね、効率良く生きなくちゃダメだよ。

僕 う、うん…

星野 ここはまだ小さくて何も無いけれど、いずれ僕等はここから大きく育つ。この部屋は僕等にとってちょうどいい、始まりにはぴったりの部屋なんだ。

僕 うん、わかった、頑張る！（立ち上がる）。

と、山本がやってきて、

山本 どこ行くんですか？

僕 今日はお見合いなんだ。あんまり気が乗らないけど部長の紹介だから断れなくてイヤだなあって思ってたけどこれからは頑張ると決めたからって君は誰だ？

山本 サラリーマンはそういうのが大変なんですよ。

星野 それは是非頑張って来たまえ。

僕 ねえ星野君、誰？

星野 彼は山本君と言ってね、劇作家をやっているんだ。

僕 うん…。

山本 どうも、山本です。

僕 …鬼頭です。

僕、部屋を出ると、後日になっている。
会社の上司がやってきた。

部長 ああ、来た来た。

僕 おはようございます。…今日は、よろしくお願ひ致します。

部長 君は、そのスーツしか持ってないのかね？

僕 はい…。

部長 明るいネクタイをした方がいいね。

部長、鞆からネクタイを取り出す。

僕 あの、部長…

部長 君は顔がワイルドだからね、このくらいの方が良いだろう。

僕 私は、この通りの性格ですので、失礼な事になりはしないかと、

部長 資料は、目を通してくれたらうね。

僕 あ、はい。

部長 良いお嬢さんだろう？

僕 いや本当に、恐縮至極であります。

部長 上手く話に乗って行かないとダメだよ。

僕 はい、承知しております。

部長 あ、来ましたよ。時間ぴったりだ。

かなこ、やってくる。

部長 おや、お一人ですか？

かなこ …。

部長 こちらが、佐伯かなこさん。

僕 はじめまして…。

部長 鬼頭洋一君です。

僕 鬼頭と申します。

かなこ …。

部長 じゃあまあ、堅苦しい自己紹介は、抜きにして、どうかね、立ち話もなんですから、座りましょうかね。

部長と僕、その場に座る。
かなこ、立ったまま。

部長 かなこさんはね、ほら、君も行ったことがあるだろう、小山建設の、

僕 あ、はい。

部長 あそこの事務をやられてるんだ。

僕 はい。

部長 いつももくもくと仕事していらっやってね、実に勤勉なお嬢さんなんだ。

僕 はあ…。

部長 鬼頭君もね、もくもくさにかけては負けてはおらんのですよ。いつも実にもくもくと仕事しております。いつもあれは何をやっているんだい？私が知らんでどうするんだという話ですな、ははは。

僕 ははは…。

かなこ …。

部長 鬼頭君は、趣味は何かな。

僕 趣味は…、読書、ですかね…。

部長 読書。かなこさんもね、読書が趣味だと伺っておりますよ。

かなこ …。

部長 いいですよえ、読書は。どんな本を読むんだい？

僕 あ、えー、歴史ものを…。

部長 歴史。うん、「歴女」なんて言葉があるくらいですからね。かなこさんもね、歴史が好きだという事でね？

かなこ …。

部長 うん。鬼頭君は、あれかい？嫌いな食べ物なんか、あるんだっかい？

僕 あ、えー、えー、

部長 ブロッコリーが嫌いだったね。

僕 あ、はい。ブロッコリーが、はい。

部長 かなこさんは、嫌いな食べ物、何かありますか？

かなこ …。

部長 ブロッコリーはね、何が嫌いなんだい？

僕 えー、

部長 あれは、「木」みたいだからね。グーグルアースで、公園の上空写真とか見ると、ブロッコリーがいっぱい
だなんて思うよね。うん。森のね、ブロッコリーのね。うん。

かなこ …。

部長 学生時代は君何をやってたの？サッカーやってたの？

僕 あ、はい。

部長 どこ？ポジションは？

僕 あ、えー、左のハーフ、です。

部長 ミッドフィルダーって奴だね。うん。それでなに？上手かったの？

僕 いや全然、三年間やって、試合に出たり出なかったり。

部長 補欠だ。

僕 まあ、はい。

部長 補欠も、サブとか言うのかね、最近は。

僕 あ、さあ、どうなのでしょう。

部長 かなこさんは、あれですよ？卓球部。

かなこ …。

部長 卓球部なんですよ。

僕 はあ。

部長 じゃあ後は若い二人に任せて、年寄りはおいとましましょうかね。

僕 …部長。

部長 じゃあ、頼んだよ。

僕 あの…。

部長、僕の肩に手を置き、去っていった。

長い沈黙。

僕 …彼女はそれから三時間、一言も喋らずただ立っていた。いつの間にか日が暮れて、雨が降ってきた。

かなこ、去る。

僕 そして彼女は帰って行った。

部屋では、星野が山本にノートをみせている。

星野 連絡ノートを作った方が良いんじゃないかと思ってね、僕が提案したんだ。ここにお互いが居ない間の
事、気付いた事などを書いて行く。昼間に宅配便が来た、洗濯をした、食器を洗った、何時に家を出て何時
に帰宅したか。

山本 こんな事まで書くんですか？

星野 これはね、光熱費の為に書いてあるんだ。僕は構わないと言ったんだが、昼間と夜では電気の使用量が
違うから電気代が折半なのはおかしいって彼が言ったんだ。だから、光熱費も時間で割るようになった。

山本 細かいな(ノートをめくる)。

星野 月々の家賃と光熱費は、このディズニーに入れておく。

星野、ディズニーランドのクランキーのアルミの箱を取り出す。
僕、帰ってきて、ベッドに横になる。

星野 お帰り。

僕 ただいま。

星野 ノートはただの連絡帳のはずだった。だけど帰宅する時間を書いていると、なんだかその理由も一緒につ
けなくなるもので、

僕 今日は九時に帰宅した。新しい仕事を覚えなくちゃならなくなったから忙しい。

星野 それは良かったじゃないか、頑張れ。

僕 ありがとう！

星野 それからはだんだん鬼頭君の日記色が強くなってきた。おかげで僕は鬼頭君の日記を毎日読んでいると
いう訳さ。

山本 これは、僕も読まなきゃいけないんですか？

僕 君と共同生活を始めてから、なんだか僕の運気は上向きだ。いろんな事が上手く行っている気がする。

星野 そうか、僕も嬉しいよ。

僕 気がしたけど、違った。

星野 ん、どうした急に？…というように感想も書くようにしているんだ。

山本 すいません、今のは、二日掛かっている訳ですか？

星野 そうだね。

山本 …なるほど。

星野 ん？

山本 なんだか交換日記みたいですわね。

星野 気持ち悪いなんて誰も思っちゃいないよ。

僕 今日もかみなさんは会社の前で待っていた。彼女にしたら隠れているつもりらしいけど、僕はすぐわかった。
声を掛けようか一瞬迷ったけど、彼女は隠れているつもりだから声は掛けない方が良いと思った。

星野 それは声を掛けた方がいいだろうね。隠れている風の見つけて貰いたいというサインなんだ。

僕 君がそういうから今日こそは声を掛けようと思ったけどやはり勇気が無かった。彼女、最初は壁から八分の
一だけ身体を出して、片眼でこちらを見ていたんだけど、次の日からはだんだんと身体が出て来ているん
だ。その次の日には半分出てて、今日なんか全部出て普通に立ってた。僕はもうなんと言ったらいいのか判
らなくなってしまって、それでも気付かないふりをして帰って来たんだ。

山本 …なんですかこれは、怖い話なんですか？

星野 いや、本当に怖いのはここからなんだよ。

僕 彼女は毎日毎日僕の後をつけてくる。何も言わずにちよつとずつ距離を詰めてくるんだ。今日はどうとうマン
ションの向かいまで付いて来た。これで僕のマンションが彼女にバレってしまった。

「ピンポーン。」

僕、顔を上げて、固まる。

「ピンポーン。」

「ピンポーン。」

僕は恐る恐るドアのそばまで行く。物音を立てずに。

「ピンポーン。」

「ピンポーン。」

のぞき穴を覗いて、また部屋に戻る僕。

「ピンポーン。」

「ピンポーン。」

女の声 隣の岩永です。

僕 …はい、何か？

隣の奥さん・岩永、タバスコの小瓶を持って立っている。

岩永 タバスコを借りたんです。昼間。

僕 あ、タバスコ？

岩永 ありがとうございます。

岩永、去っていく。

僕 タバスコ、返しに来たよ。

星野 いや、僕は貸してないよ。

僕 …でも返しに来た。

星野 台所に置いておいてくれ、確認してみるから。

僕 わかった。

僕、台所にタバスコを置いて戻って来る。

星野 それでね、次の日台所を見てみると、タバスコなんてどこにも無いんだ。

山本 え？

星野 うん。

山本 どういう事ですか？

星野 さあ、これで僕はなんだかわからない感じになってしまった。鬼頭君に確認しようにも、ノートに書いて返事を聞くには次の日の朝、つまり二四時間待たなくちゃならない。僕はもやもやした気持ちのまま小一時間タバスコを探してみたのさ。

僕 台所に置いておいたよ。おかしいなあ。僕も探してみる。

僕、台所へ。

山本 これは大変だ。たったこれだけのやりとりなのに、三日も掛かってる。

星野 そうなんだよ。

僕 (戻って来て) 本当だ。無い。

星野 そうだろ？

僕 うん、無い…。

星野 無いんだよ。

僕 どうして無いんだろ？

星野 さあ？

僕 おかしいなあ…。

山本 すいません。

星野 ん？

山本 ノートでやりとりしてるんですから、こんな日常会話レベルで話してたら、もうあつという間にその…もうバカですよ。

星野 ん？

山本 もっと要点をだだだっ書かないと、

星野 僕等は君みたいな劇作家じゃないんだ、普通の人なんだよ？

山本 いや、これは気長すぎますよ。

僕、部屋を見回している。

山本はノートをめくる。

僕 泥棒だよな？

星野 え？

僕 泥棒に入られたんだよねきつと？

星野 泥棒？

僕 泥棒だ！もうそう思ったら泥棒だ！泥棒に違いない！

星野 ちょっと待ち給え、昼間は僕がずっとここに居るんだよ。いつ泥棒が入るって言うんだい？

僕 最近泥棒が増えてるって誰かが言った。世の中がだんだん泥棒に有利な世の中になってるって。

星野 泥棒に有利な世の中ってどんな感じかわからないんだけど、

僕 泥棒だ。泥棒め。人の家に入ってタバスコを盗んでいくなんで、世も末だよ！

星野 いいかい鬼頭君、タバスコだけ持って行く泥棒は、よっぽどだ。
僕 ウチにはタバスコ以上に価値のある物なんて無いんだ…。
山本 タバスコをわざわざ持って行きますかね、泥棒が。
僕 君が家を出て、僕が帰宅する間に泥棒が入ったんだ。
星野 確かに最近の鬼頭君は帰宅するのが九時を越える日が多いんだ。
僕 僕がいけないんだ…。お見合い以来、部長にすっかり気に入られてしまってね、仕事をたくさん引き受け過ぎた。だから残業が多い。
星野 じゃあわかった、君がそこまで言うなら警察を呼んでみるかい？
僕 たかがタバスコ一個でマッポの世話になるなんて恥ずかしいったらありやしないよ！
星野 じゃあどうしたらいいんだらうなあ。
僕 僕は本当はついてない男だったんだ。最近ちょっと勘違いして罰が当たったんだ。僕は本当についてないんだ。ついてない男の所には世の中のついてない事がどんどんと集まってくる。僕はついてない事を引き寄せる磁石だ。ついてない事がついてる男なんだ。ついてない事がついてる。
星野 うん、わかったよ。
山本 それで僕が呼ばれたんですね。
星野 じゃあこうしよう。君が帰って来るまでの二時間、僕がこの部屋を借りようじゃないか。
僕 …え？
星野 朝七時から夜九時までの間、僕がこの部屋を借りる。これで泥棒が入る余地はなくなる。
僕 …うん、それは有り難いんだけど、
星野 出来るだけ家に誰も居ない時間を作らないようにしよう。
僕 僕だって毎日残業って訳じゃないんだ。残業じゃない日はどうしたらいいかな？
星野 残業じゃない日は嬉しいじゃないか、自分の為の時間に使える。
僕 う、うん、まあね。
星野 そうだ働き給えよ、せっかく僕がこの家を守っているんだ。思う存分働き給え。
山本 鍵掛けてないんですか？
星野 鍵は掛けてるよもちろん。でも鬼頭君言ってたろ？泥棒に有利な世の中になってきているんだ。鍵なんかあつてないようなもんだよ。
僕 でもさ、そんな事して君の仕事は大丈夫なのかい？
星野 実はね、僕はここを出て仕事までの間、ファミレスで時間を潰していたんだ、二時間ばかり。だからちよっどいいよ。
僕 …そんな事一言も言わなかったじゃない！
星野 だって七時から、僕の家じゃないもの…。
僕 …星野君、君はそこまで気を遣ってくれていたのか！ありがとう、僕は今、涙を流している。
星野 字が滲む。いいかい、月々一時間一八七五円だから、二時間で三七五〇円。僕は明日から、月々二六二五〇円を払う。君は、一八七五〇円だ。
僕 わお、随分安くなった…。
星野 ややこしいから今月は日割りにしておくね。四月は三〇日だから…、
僕 君は、君は僕の数倍頭が良い…！
星野 いいかい鬼頭君、人間は、頭の良し悪しで決まるものじゃないんだぜ。
僕 おやすみなさい！

星野、立ち上がり、山本と共に夜道を歩いている。
僕はベッドに横になり、ノートを開いている。

星野 とは言ったものの、最初はなんとかかなるかと思ったんだけど、月々二二五〇円だったものが二六二五〇円になるのはさすがの僕も負担が大きすぎた。たった少額でも払うお金が増えるって言うのは精神的に良くない。
山本 僕は普段ファミレスに居るんです。ほとんど家には帰らない。ファミレスで食事をして仕事をする。
星野 「何をしていますか？」
山本 「劇作家のはしくれです」
星野 とういうんだ。作家というだけでも凄いのに、その上にゲキがつくんだからこれはタダ者じゃないと思った。そこで僕は彼を家に連れて来て、
僕 え…？(ノートを持って起き上がる)
山本 僕は仕事柄、経験こそが宝だと思っているので知らない人から声を掛けられても割とホイホイ付いて行ってしまふんです。どう転んでも良い経験になるだろうと思っているから。
星野 こっちです。

僕（ノートに向かって）ちょっと待って…、

星野 どうだい、狭いけどキレイな部屋だろう。

山本 わ、でも思ったより狭くは…、いや狭いのか。

星野 どうぞ。

山本 お邪魔します。

星野 ファミレスで仕事をしてたんではお金が掛かってしょうがないでしょう。

山本 そうなんです。でも僕、家では集中出来なくて。家族も居るし、テレビやインターネット、誘惑が多いから。

星野 コーヒー一杯二二〇円。他にも頼んでいるね？

山本 フライドポテトをよく食べます。

星野 ポテトは確か二九九円だ。コーヒーと合わせて五一九円。それを十日で五一九〇円だ。ここで君が仕事をしたら、月々二時間三七五〇円で済むんだよ。君の好きなテレビもインターネットもここにはない。ベッドと机があるだけだ。

山本 …確かに、ここならうん、ベッドもあるからすぐに横になれる。

星野 そうだよ。二時間は君の部屋なんだから好きに使っていいんだ。

山本 …僕の、部屋？

星野 君の部屋だ。

山本 いーいえーい！

山本、ベッドにダイブする。

星野 コラコラ、はしゃぐなよ。ははは。

僕 ねえ、星野君…、

星野 これで僕と君の間の二時間は埋まった。

僕 うん、でもね…、

星野 山本君は合気道をやっていたらしい。これでいつ泥棒がやってきても大丈夫なんだ。

山本 あいやー！

僕 星野君、無理なら無理と言ってくれれば良かったのに…、

星野 二四時間を二人で回すより三人の方がより効率的だろう？良く良く考えてみると、家に居る時間なんてそんなに多くない。

僕 それはそうなんだけどね…、道理で最近部屋が散らかっている訳だ。

山本の恋人・みほ、やってきた。

みほ 独り暮らし始めたの？

星野 僕は毎日掃除をしているんだけどね、そうか、山本君か。彼はこのノートを見ていないのかな。

僕はノートを閉じ、部屋を見回して出て行った。

山本 あ、ううん、ここは仕事部屋なんだ。

みほ え、いつからそんな偉くなったの？

山本 話すと長くなるんだけどさ、

みほ うん。

山本 こっち座って。

みほ え？

山本 説明するから。

みほ うん。

山本 ほら、早く(ベッドをポンポン叩く)。

みほ (微笑んで)ここなに？誰かの家？

山本 うんだから、それも話すから。ね、こっち座ってよ。

みほ、台所へ。

山本 あ、トイレ？

みほ ねえ、就職活動は？どんな感じ？

山本 あ、うん、まあね…。

みほ まだ決まらないの？

山本 いつももう少しの所までは行くんだよ。
みほ へえー、そうなんだ。
山本 ホント、もう少しの所なんだけどね。
みほ 凄いじゃん。
山本 だろ？どの会社受けても、ホントもう少しの所までは行くんだよ。ここはさすがに手が届かないだろうな
て会社でも、ホントもう少しの所までは行くんだ。
みほ 凄い。どの会社受けてももう少しなんて。
山本 そうなんだよ。
みほ だってもう少しの所までも行けない人も居るんだよね世の中には。なのになんかもう少しなんて。
山本 だろ？
みほ 凄いなあ。
山本 ねえねえ、こっち来てよ。
みほ (戻ってきて)でいつ決まるの？
山本 …まあさ、とりあえずこっち、こっち座ってよ。

みほ、テーブルの上のノートを見て、

みほ なにこれ？
山本 あ、それダメ。
みほ なに？(ノートを開く)
山本 それは、こここの、その…、
みほ 「今日、かなこさんがとうとう僕の部屋の前までやってきた。」

僕、帰って来る。後ろからかなこ、ついてくる。

みほ 「まさか部屋の中までは入って来ないだろうと思ってドアを開けると、かなこさんも一緒に入って来ようとした。さすがにこのまま気付かない振りをするのは無理だと思って、でもかなこさんはかなこさんで未だに僕に見つかっていないと思っているらしいので第一声がとても難しい…、」
僕 …あ、あれ？

かなこ、知らん振りをする。

僕 かなこさん、ですよ？
かなこ ……

かなこ、去る。

みほ 「やっぱりかなこさんはこの期に及んでも僕から隠れているつもりだ。僕はもうどうしたらいいのかよくわからないけど、なんだかいたたまれない気持ちになった。」
山本 「君は本当に優しいんだな。」
みほ 「優しくないよ。僕はね、優しくない。」
山本 「だったらもう少しイヤな事はイヤだと言えるようにした方が良いよ。」
みほ (読み終えて)ふーん…。

帰宅した僕は、部屋に居る山本とみほに会う。

僕 …あのお？
山本 (振り返り)あ、もうこんな時間だ。
みほ …誰？
山本 ううん、もう行かなくちゃ。
みほ え？
山本 いいから行こう。お邪魔しましたー。
みほ お邪魔しましたってどういう事？

みほ、立ち上がる。がすぐに座り、ノートに目を落とす。

僕 そういうと、彼らは逃げるように出て行ったんだ。
星野 会えたんだ、良かった。
僕 このノート、山本君も書くんだよな？
星野 そりゃそうだよ。彼は劇作家だからね、きつとんでもないこと書くよ。
僕 あのさあ…、
星野 なんだい？
僕 じゃあ言うよ、
星野 何を？
僕 イヤな事はイヤだと、言ってみるよ。
星野 お、いいぞ。その調子だ。
僕 山本君さ、知らない人あげないで欲しいんだ…、まあ、星野君もなんだけどさ、ここは結局、僕の部屋なんだからさ…、
星野 そうか、彼女を連れて来ていたのか。それは確かにそうだね。
僕 あとさ、僕の前の時間、山本君じゃなくて、星野君が良いなあ。
星野 どうして？
僕 だって、彼の後は部屋が散らかってるんだもの。山本君が散らかした部屋を星野君が掃除して、きれいになった部屋を僕が使いたい。
星野 …いいかい鬼頭君、それは言い過ぎだ。わがままとは違うんだよ。
僕 ごめんなさい。
星野 いやいいよ。じゃあそうしてみようか。山本君、この話どう思う？
山本 …。
星野 山本君？
山本 …。
僕 ねえ、彼がこのノートを開くの待っていると、いつになるかわからないから星野君、どうか直接言ってくれないかい？
星野 そうか、そうなると僕は山本君が帰ってくるのを待ってなきゃならない。
僕 すぐ出ないとマズイのかい？
星野 いや、そうじゃないんだが顔を合わせると、途端共同生活している事を思い出しちゃうんだ。こうして一人で居る時は、一人暮らしているから。
僕 それは実に共感出来る。じゃあどうしよう？
星野 でもここは僕が連れて来た責任もあるから、明日だけ待ってみるとしよう。
僕 ありがとう。

「ピンポーン。」

僕 …。

「ピンポーン。」「ピンポーン。」「ピンポーン。」「ピンポーン。」「ピンポーン。」「ピンポーン。」
僕は恐る恐るドアのそばまで行く。

女の声 隣の岩永です。

僕 あ、はい？

岩永、酔の瓶を持って立っている。

岩永 お酔を借りたんです。屋間。

僕 あ、酔？

岩永 ありがとうございます。

岩永、去っていく。

僕 酔も貸したのかい？

星野 え、貸してないよ。

星野、山本に話し掛ける。

星野 やあ、久しぶり。

みほ、ノートを閉じる。

山本 あ、お久しぶりです。あれ？まだ居たんですか？

星野 うん…、実はね、君に話があつてね。

山本 あ、はい。

星野 あ、初めまして。

みほ どうも…。

星野 すいませんね、いきなり。

みほ あ、いえ…。

星野 どう？書いてる？

山本 あ、はい。ぼちぼち。

星野 そう。

山本 …で？

星野 あ、ノート、読んでくれるかい？

山本 ノート？

星野、新しいノートをテーブルの上に置き。

星野 ここに、置いておくから。

山本 はあ…。

星野 じゃあ…。

山本 なんだらう…？

山本、ノートを開く。

星野 山本君、あのね、時間帯をね、ちょっとずらして貰えないかなと思って…、

山本 え？

かなこ、鼻歌を歌いながらスキップをして、買い物袋を提げてやってきた。

ドアの前でみほが居る事に気づき、買い物袋を落として、去る。

みほ …ねえ、誰か来たみたいなんだけど。

僕 でも、返しに来ただけど…。

星野 貸してないんだけどなあ…。それでね山本君、今ほら、山本君は、夜の七時から九時じゃないですか、

山本 はい。

かなこがスキップで買い物袋を提げてやってきてドアの前でみほを見て袋を落として去る。

みほ また誰か来たんだけど。

僕 今度こそ、台所に置いておくから。しっかり、置いておくから。

僕、キッチンに酢を置き、出掛ける。

星野 そんなだつて、今時調味料借りに来るかい？山本君、それを、僕の前にならないかな？

かなこスキップ買い物袋提げドア前袋落とし去る。

みほ これ(買い物袋を三つ持ち上げて)どうしよう？

山本 え？…なにソレ？

みほ (袋の中を覗いて)枝豆。

山本 気持ち悪いからそのままにしておこう。

みほ うん…。

僕 良いんだけどね、僕は好きなんだけどね、そういう古き良き日本。

星野 まあ、そうなんだけどね。ねえ、山本君。

山本 …。

星野 山本君？

山本 …。

星野 山本君…？ねえ、彼女さんといちゃついている？ねえ、いちゃつかないで、ノート読んで。

山本 …。

僕 星野君…。

星野 彼女さんへ、このお部屋は、僕と山本君と、もう一人の男の三人で住んでるんです。まあ住んでるって言うか、時間帯で区切って、それで、僕の後の時間が山本君の二時間で、その後、もう一人の男の時間なんです。

山本 すいません、はい。なんでした？

かなこ、やってきて、部屋を見回す。

星野 あ、山本君だ。うん、それでね、それを、ねえ山本君、僕の前にならないかな？

山本 すいません、なんの話でしたっけ？

星野 …だからノート読んで貰える？さかのぼって。全部書いてあるから。

山本 …。

僕、帰って来て、部屋の中になかこが居るのに驚く、が見て見ぬふりをしてノートを開く。

星野 山本君、どうかな？

山本 …。

星野 山本君？

山本 …。

僕 星野君、やっぱりダメだよ山本君。全然ノート見ないもの。

星野 そうだねえ、こういう時に、離れていても、話が出来るといいのだけれど…。

僕 それは電話だね。

星野 電話。あれ、高いんだ。

山本 前って、え、何時ですか？

星野 あ、山本君！もうちゃんと毎日ノート開いて。待ってたんだよ君の文字を。うんとだから、朝。

山本 朝？

星野 うん…。

山本 え、朝の？

星野 だから、七時から…

山本 え、え、なんで朝七時にわざわざここに来なきゃいけないんですか？

星野 それはだから、仕事しに…

山本 いやいや、仕事する時間くらい自分で選ばせて下さいよ。

星野 うん、まあ、そうだよね。

山本 僕朝はちょっと、寝たいんですよ。夜型なんです。

星野 うん、それはまあ、うん、みんな、うん…、

僕 ここホント便利。職場まで近いし、駅も目の前だし。

星野 そうだね。

僕 帰るのめんどくさいなあ。

星野 え？！

僕 明日朝早いんだよね、ここなら楽。

星野 いや、それはうん！とても良いことだけど…、それは無理なんだよ、次の人来るし。

僕 あの猿みたいな人？

星野 うん。

僕 星野君！星野君、がんばって！

星野 ねえ彼女さん、ちょっとごめん、今はとりあえず山本君と話をさせて下さい。…別の所に、泊まらない？

僕 え？

山本、みほにキスをしようと近づく、

僕 そんな余裕あるの？

星野 山本君！

僕 ここは僕の部屋なんですよ！

かなこがキッチンの影から見ている。

みほ 誰か居る…？

山本 …え？

かなこ、隠れる。

星野 山本君！山本君はさ、じゃあ何時が希望なのかな？

山本 そりゃあ今の時間が一番良いですよ。

星野 でもそれだと、僕の後で、鬼頭君の前になっちゃうから、

山本 え、何が問題なんですか？

星野 うん、だからノート読んで？さかのぼって。

山本 だってこれ交換日記じゃないですか、なんだか恥ずかしくて。

みほ 今日はかなこさん、会社の前に居なかった。もう彼女は僕のの前には現れないんだと思ってウチに帰るとかなこさん部屋に居た。…！（見回す）

山本 さすがの僕もこれはいけないと思って、このままでは星野君達にも迷惑が掛かる。

みほ それでどうしたんだい？

山本 かなこさんはまだ隠れているようだから、僕はもう彼女を見つけてあげない事にした。

みほ …は？

山本 見つけて貰えないんじゃ、いつまでも隠れていられない。

みほ そうか、それは確かに優しくない。

山本 そうさ、僕は悪魔のような男なのさ。

みほ これ、なんの話？

山本 さあ？

星野 これは連絡帳なんです。大事な連絡することが書いてあるんです。君も書くんですよ。ちょっと彼女さんごめん、黙っててくれる？

みほ …黙ってますけど？読んでだけなんで。

山本 みほって言います。

みほ 汚い字。

僕 星野君…。

星野 あのお、すいません。みほさんはここの部屋の住人じゃないんで、ノート書かないで貰えますか？



みほ (うんち)

星野 …あの、こういうのヤメテ、ノート汚くしないで。



みほ

僕 星野君…。

星野 落書き帳じゃないんですよ…。



みほ

星野 ねえ山本君！山本君書いて！ノート読んで、ちゃんと考えて！

みほ 今寝てます。

星野 起こして下さい。話をしようと伝えて下さい。

みほ …。

星野 山本君！

みほ …。

星野 山本君！

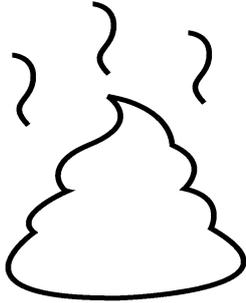
みほ …。

星野 彼女さん！

僕 星野君…、もう一ヶ月経っちゃった。

星野 …わかってるよ。今ノートを新しくするから、きっと気付いてくれると思うんだ。

星野、ピンクの大きめのノートをテーブルに置く。



みほ

星野 もお！せっかくキレイなノートなんだからいきなり変なのヤメテ！

みほ うるせえなあお前、なんだいちいち。

星野 …山本君は？山本君はどこですか？

みほ ユウキは、死にました。

僕 え？！

星野 ええ？！

山本 生きてます。

みほ バカバカ、バーカ。 ばーか。 ばーか。 ばーか。  ばーか。
 ばーか。 ばーか。

僕 星野君！

星野 もうホントいい加減にして！あなたもう帰って！二度と来ないで！なんで君が居るのかわからないし、もうノート書かないで！

みほ あんだお前、やんのか？

僕 星野君！

星野 山本君と話がしたいって言ってるでしょう！黙ってるよ女はよお！

みほ  なんで女は黙ってなきゃいけねんだよ！男の方こそ黙ってろよ頭わりいんだから特におめえらみてえな腐れちんぼこ野郎はよお！

僕 星野君！

星野 腐れちんぼこ野郎は言い過ぎじゃないかよ！

みほ 腐ってんじゃねえか、どうせ一回も使ってねんだろがよ！

僕 星野君…！

星野 使ったことあるわちよつとぐらい！

みほ ちよつとじゃねえか捨てちまえそんなもん！

僕 ひどい！

星野 なんで捨てなきゃなんねんだよ！

みほ 引きちぎってやるよこっち来いお前！

僕 星野くん！

星野 行ってやるわお前逃げんなよ！

みほ おう来いよ。

僕 …。

星野 …。

みほ 早く来いよ！お前いつになったら来んだよ！

僕 星野君…。

星野 忙しいんだよ仕事がよお！

みほ おめえみてえな野郎が働いたって社会にとってなんの意味もねえよ辞めちまえアホが。

僕 星野君！

星野 俺だって意味ねえ事くらいわかってんだよ、けどしょうがねえだろ、お前国民の三大義務知ってっか？
みほ 知ってるよんなもん！
僕 星野君！
星野 言ってみろよ！
みほ それがなんなんだよなんの話だ、おまえ社会の先生か！
僕 え？！
星野 俺が社会の先生な訳ねえだろ、早く言えよ！
みほ お前が社会の先生だったら生徒くれるわ！
僕 え？！
星野 だから社会の先生じゃねえって言ってんだろ！

吉田、やってきて、

吉田 もうホント、喧嘩は止めて下さい…。
みほ 夜中にドンキホーテ行く生徒ばっかだわおめえのクラスみちゃ。
吉田 いいじゃないですかドンキホーテ行ったって…。
僕 星野君！
星野 なんでドンキホーテの話になんだよ、早く答えろよ三大義務をよお！
みほ フォアグラ、トリュフ！
星野 お前それ三大珍味だろうがよお！んで後一個どうしたんだよ！
吉田 キャビア。
みほ キャビア。
僕 星野君！
星野 教えて貰ってんじゃねえよ！
みほ あんだこの野郎！
僕 星野君！
吉田 はいもうこの辺で、ね。
星野 お前ノート破れんだろうがよ！
みほ うるせえよおめえが先にいちゃもんつけて来たんだらうがよ！
僕 星野君！
星野 ノート！くしゃくしゃにすんじゃねえよ！
吉田 あーあーあー、僕がちゃんとアイロン掛けておきますんで。
みほ ビリビリに破いてやろうかあん？男同士で交換日記なんかやってんじゃねえよ気持ちわりい。
僕 今日はかなこさんと一緒に帰って来た。ご飯を作って貰った。やきそばだったけど焼きすぎて、まるで枯れ木を食べている気分だった。
星野 それは良かったね。どんなモノでも、一人より二人の方が美味しく感じるものさ。
僕 星野くーん…、僕はこんな事書いてない。
星野 君これはひどいよ。こんな事書き出したら何が本当で何が嘘かわからなくなってしまうんだからね！その途端メタ構造に突入していくからね。このノートには本当にあった事しか書きちゃダメなんですからおい山本君、君この彼女なんとかしてくれないか。
山本 あのお、なんか時々知らない人が書いてるんですけど…他にも誰か居るんですか？
吉田 しょうがないなあもお…(ノートをパラパラめくる)

「ピンポーン。」

僕 はい。

岩永、立っている。

岩永 ケチャップ、お借りしたんです…。
僕 …あ、あの、タバスコも酢も、貸してないって言うてるんですけど…？
吉田 (ノートを読んで)「夜、時々、隣の部屋から物音がする。誰かが暴れているようだ。隣の奥さんが泣いている。」
岩永 …ありがとうございました。

岩永、去る。

星野 とにかくですね、ここは相談し合って決めていこうじゃありませんか。鬼頭君の要望としては、山本君の後に、僕を間に挟みたいという事なんです。

山本 僕、別に散らかしてないんですけどね。

僕 誰かケチャップ、貸しました？

星野 貸してないよ僕は。

みほ、ティッシュで鼻をかんでその辺に捨てる。

星野 …ねえ山本君、何が散らかっているかというのはそれぞれ基準がありますから、もちろん鬼頭君も神経質になっちゃいけないとは思いますがね。

山本 ケチャップなんてどこにあるんですか？

僕 部屋には、なんか変な毛とか落ちてるし…。え？！（台所へ）

星野 毛はね、ヤダね。

山本 毛くらい落ちたってイイじゃない、人間だもの。

みほ なんとかみつお。

僕 …本当だ、ケチャップ無い。知らない？

星野 山本君もさ、ここは自分だけの部屋じゃないという事を自覚して、小まめにコロコロをかけるとか、してくれると助かるんだ。

山本 僕そこまで毛だらけじゃありませんよ。

みほ 猿じゃねんだからよお！

山本 ウキー。

みほ 猿じゃねえかよ。

吉田 猿が居るのか…？！

僕 酔も無い。知らない？

星野 …うん、そりゃあ猿じゃないことはわかってますけどね。そりゃあかなこさんじゃないのかい？さあどうしようか山本君？この間の話だけど、考えてくれたかな？

山本 え、何をですか？

僕 かなこさんは料理してないもの。おかしいなあ、しっかり台所に置いておいたはずなのに…。

吉田 うーん、そもそも貸してない物をどうして隣の奥さんは返しに来るんだらう？

星野 だから、朝七時から九時までに移動するか、小まめに掃除をするか、どちらがいいかな？それは確かにそうだね。山本君達知らないよね？

山本 お酔ですか？

みほ オス、おら悟空。

山本 見てないですね。でもそれって、どうして僕だけ妥協しなきゃいけないんですか？

僕 おかしいなあ、部屋に誰かが入ってくる隙はもう無いはずなのに…。

星野 本当の泥棒だと言うのかい？そりゃあもちろん僕だって頑張るんだよ。鬼頭君だってね、頑張るよね？

みほ 本当の泥棒って何よ？

僕 皆さん、戸締まりは確実にお願いします！出掛けてすぐ次の人が来るからと鍵を閉めないで出掛けるのはやめてください。くれぐれも！

星野 さあ、僕は鬼頭君に丸一日無視されたけど、山本君、僕の前ならどんだけ毛を落として貰っても構わないんだ、全部掃除するよ。

みほ こちとら猿じゃねえんだからよお！

山本 ウキー。

みほ 猿じゃねえか。

吉田 猿が居るのか！？

みほ 好きな食べ物なに？

山本 そば。

みほ ざるじゃねえか！

吉田 …猿が居る訳ないか。ていうか猿がノート書くはずないんだ。

僕 ごめんよ星野君、うん、僕も頑張るよ。

星野 僕だってね、そりゃあ朝七時には帰ってきたいんですよホントは。でも君が、朝七時から二時間使っちゃったら朝九時まではどこかで時間を潰さなきゃならない、すぐに寝たいのを我慢するんです。

山本 でも夜九時までには居られるんだから時間的には変わらないじゃないですか。

吉田 もしかしたらですよ、誰かが嘘を書いているんじゃないですかね？隣の奥さんなんて居ない、なんていうオチとか。

僕 僕が嘘を書いていると言うんですか？

吉田 …え？！

星野 まあ合計時間はね、そうなんだけどね…

みほ 来週から遅番になっちゃった…。

山本 あ、そうなの？何時？

みほ 一時過ぎかなあ？

山本 じゃあこうしましょうよ、朝の時間に変わりますから。その代わり三時から九時まで使わせて下さい。

星野 …は？三時？夜中の？え、三時？…

山本 はい。

星野 …え、こんな事言ってるけどどうしよう鬼頭君、頑張れるかい？

僕 そんなの無理に決まってるじゃない。だってそうすると僕は夜中の三時に家を追い出されるんでしょ？僕どこに行けばいいの？僕の仕事は市場じゃないんだ。

星野 そうだよな…。山本君、それはいくら何でも無理なんだ。鬼頭君は夜九時に帰って来るんだから、三時に家を空けるとなると睡眠時間がコレ六時間になってしまう。

山本 充分じゃないですか。

星野 充分だよな…。鬼頭君どう？やれる？

僕 うんとね、それだと、帰って来て、服も脱がずに気絶するように倒れて眠って、起きたらすぐ出掛けなくちゃならない。そのび太だもの。

星野 のび太に似てるんですよ、鬼頭君は。

吉田 鬼頭さんは、のび太に似ている、のか。

みほ、吉田の読んでいるノートにのび太の絵を描いた。

山本 下手だなあ。

星野 またそうやって絵描くう…、

吉田 こんな感じか？(絵を描いた)

山本 上手い！上手すぎる！

僕 ねえ、のび太に似てるとか関係くない？だって僕は野比のび太じゃないんだ…。

星野 そうだよ。鬼頭君は野比のび太じゃないんだからさ、ダメだよからかったりしちゃ。

みほ …(のび太の絵を描く)。

星野 もお…、

山本 また下手のび太…。

みほ …(のび太の絵を描く)。

山本 あれ？のび太、お腹空いてる…。

星野 ねえ、彼女さん、落書き止めて。

みほ …(ドラえものの絵を描く)。

山本 ん？ドラえものの頭に、フォークを…？

みほ グサ(絵を描く)。

山本 え？！

みほ …(ドラえものの絵を描く)。

山本 それを、持ち上げて…？

みほ …(ドラえものの絵を描く)。

山本 だんだん上に…？

みほ …(ドラえものの絵を描く)。

山本 さらに上に…？

みほ …(ドラえものの絵を描く)。

山本 のび太の口元近くまでやってきて？

みほ カリッ(絵を描く)。

山本 ドラえもん！

吉田 のび太満腹(絵を描く)。

山本 上手い！また上手のび太出現！

星野 コレ！もうパラパラ漫画止めて！凄いページ使っちゃうから。ノートもタダじゃないんだよ。そうだ、ノートのお金もみんなで割りましょうよ。これ僕買って来たんだからね、今度は山本君達

吉田、ノートを閉じた。

台所へ行き、水を飲む。

トイレに行き、
戻って来て、
ノートを開いた。

星野 買って来て。君達が、特に彼女さんが一番使ってるんだからさ。じゃあもうこうしようよ、一ページ幾らって
いう計算にしようよ。

みほ 細かいわ！

星野 だってそうしないと無駄使いするんだよ、君は。山本君だってさ、夜中の三時にここに来て何するつもりなの？

山本 寝るに決まってるじゃないですか。他に何するんですか？

みほ のび太としずかちゃん(絵を描く)。

僕 ここはそういう部屋じゃないんだ！

星野 ねえよく考えて、夜中の三時にここに来て、朝九時には出て行かなきゃならないんだよ。

山本 充分じゃないですか。

みほ のび太とジャイ子(絵を描く)。

僕 ここはそういう部屋じゃない！

星野 電車も動いてないしさ、どうやって来るの？わざわざ夜中の三時に来なくても良くない？

吉田 あ、のびすけを描いてしまった…。

山本 のび太の息子だ！ていうかコレ誰が描いてるの？

星野 弱ったなあ…、どうしたら効率良く回るんだらう。

みほ 何見とんだて。

星野 …え？なんにも見てないんですけど、ていうか見える訳ないんですけど。

みほ 見とったがや思っきり。

星野 え？

みほ 見とったがや！

星野 (舌打ち)。

みほ なんだお前。

星野 は？

みほ あん？

星野 はあ？

みほ なんだ？

星野 あん？

吉田 凄い、こののび太のやりとりだけで一ヶ月弱掛かっている…。

かなこ、洗濯をしたり掃除をしたりしている。
「ピンポン。」

吉田 隣の奥さん、ですね。

僕 はーい…。

岩永、立っていて、

岩永 甜麺醤(てんめんじやん)をお借りしたんですけど。

僕 てん、…え？

岩永 …ありがとうございました。

僕 …誰か、貸した？テンメンジャン…。誰ですか？テンメンジャンを貸したのは。

吉田 タバスコ、酢、ケチャップ、テンメンジャン…。

僕 隣の奥さんが泣いている…。誰かが、暴れている。

吉田 そうか、そういう事だったのか…！あのお、鬼頭さんはこの時、隣の奥さんを引き留めるべきでしたよ。

僕 え？

吉田 この調味料の頭文字、見て下さい。

山本 あのすいません、この人誰ですか？

僕 …あ！

星野 あ！

吉田 奥さんはサインを送っていたんですね。

僕 …どうしたらいいですか？

吉田 それは僕に聞かれても…、僕は今、過去を変えてしまった事になるのかな…。
僕 どうしよう星野君、助けに行った方がいいのかなあ？
星野 助けるって、どうやって？
山本 ねえこの人誰？
みほ 新しい人じゃない？
山本 え、いつから居たんだったけ？

吉田、ノートを「バン！」と閉じて、立ち上がる。

吉田 僕はこの部屋の住人です。押入れを掃除していたらノートがたくさん出て来まして、中身はほとんどどうでも良いことばかりで読んでいるこっちもどうかしていると思うのですが、それよりも何よりも僕が驚いているのは…皆さんどうして僕の書いた事に返事してるんですか？

セミの鳴き声。
かなこ、洗濯物を干している。

僕 星野君、最近ちっとも洗濯してくれないんだね…。部屋も山本君と同じくらい散らかってるしさ。

と言って、洗濯かごをかなこに渡す。

星野 だって鬼頭君、山本君たらひどいんだよ、夜中の三時から昼の十二時まで貸して欲しいって言うんだ、結局朝九時に起きられないからって。そんなの始めから判ってた事じゃないか、あの子バカだと思うよ。
山本 時間を代われと言うから妥協したんですよ。僕は夜の七時九時が良かったのに。じゃあいいんですよ、出て行きますから。
星野 こういう事言うんだもん、山本君てさ、ヒトの足元見るの得意だよな。
みほ あっつい、この時期が一番暑いわ。

みほ、エアコンのスイッチを入れる。

星野 なんて僕の方に被害が飛んできるとはかわからない。ねえ鬼頭君、元はと言えば君が言い出したわがままでこんな事になったんだから、なんとかしてくれないか。
僕 僕だって朝三時に家を出なくちゃいけないんだ。眠いんだ。君はまだいいじゃないか、昼の十二時から夜の九時まで居られるんだから。僕なんか夜の九時から朝三時だぜ。山本君は朝三時から昼の十二時。ねえ知ってる？三人の中で僕が一番持ち時間少ないんだ、僕の部屋なのに…。
星野 ダメだ。なんだか内容がちっとも入って来ない。じゃあこうしよう。時間帯を元に戻そうじゃないか。
僕 それが出来たら僕もそれがいいと思う。
星野 山本君、そうしよう。これでみんなの希望の時間帯になるよ。
山本 …。
星野 うん、こうやって都合の悪い時にはノート開かなくなるのやめようよみんな。出来るだけみんなで話合っ
て涼しいなあ…。
僕 だから彼には直接言った方がいいんだってばよ。彼を連れて来たのは星野君なんだからさ、ちゃんと責任持
って指導してくれないと涼しいなあ…、エアコン。

しばしの間。

僕 (スイッチを切って)ねえ誰？エアコン取り付けたの？！
星野 彼女さんだよきっと。
僕 彼女さん！ここは僕の部屋なんです！なんで勝手にこういう事するんですか！
星野 そうですよ、こんなのつけたらもの凄い電気代だよ。僕知らないからね。使った人が払ってよね。僕はつ
けてませんからね！付いたら正直にその時間を書く！これを徹底して下さい！

星野、エアコンのスイッチを押す。

僕 涼しいなあ…。
星野 消すと暑いんだよ。
僕 だからダメなんだってば、星野君出る時切ってよ、涼しいじゃん！

星野 ごめんよ。切れないんだ、僕には、どうしても、あのスイッチを。
僕 そんなの、僕だって一緒さ…。僕だって、辛いんだからね、スイッチ切るの…。
吉田 僕の書いた事に返事が来ると言う事は、僕は今、過去と繋がっている…。
山本 時間を元に戻すんですか？
星野 あ、山本君だ。君ちゃんとノート見てよね、君の話で持ちきりなんだからさ。
山本 でも鬼頭さんは、僕のすぐ後はイヤなんですよ？いいんですか？
僕 もういいよ。
星野 もういいんだって、ってそれじゃあホントにただのわがままだったのかい？
僕 だって今は、(かなこを見て)なんだか知らないうちに部屋がきれいに掃除されていくからさ。
星野 何？ロボットでも買ったの？
僕 そうじゃないけど、なんだかもう大丈夫になった。
星野 そんな急に方針変えないでよ、だから山本君が調子に乗っちゃうんじゃないか。
山本 じゃあいいですよ、時間戻しましょう。その代わり昼の十二時から夜の九時まで貸して下さい。
星野 コラコラコラ、何がその代わりなんだ。
僕 いいよそれで。
星野 良い訳ないでしょうが！それ僕の時間帯だからさ。山本君さ、君はそもそも会社に勤めている訳じゃないんだから別にいいじゃないか何時だって。そうやっていつでもバカな本ばっか書いてればいいんだよ君みたいなもんは。ていうか君、こんなに借りる時間増えて家賃払えるのかい？
みほ 私が借りてるんです。
山本 そうなんです。
僕 え？！
星野 え、そうなの…？
僕 星野君、又貸しの又貸しは、法律的にどうなの？
星野 ダメに決まってるよ。
僕 ダメなんですよ。
みほ あなたが最初に又貸したんでしょ。
僕 星野君…。
みほ 私が七時間借りて、ユウキが二時間、合計で月々一六八七五円。
星野 ダメ！もう定員オーバーなんです、ダメです。
みほ じゃあ判りました、出て行きます。エアコン外して。
僕 星野君！
星野 貴様、だからエアコンを付けたのか…！
僕 やられた…。
吉田 人は一度甘い蜜を吸うと、抜け出すのが難しいと言いますからね。
みほ 鬼頭さん、困るんですよ、ちゃんと三時には出て貰わないと。これからはね、一分一秒でも延長したらその一時間分払って頂きますからね。
星野 なんで君が仕切るんだよ！ここは僕と鬼頭君の部屋だったんだからね！
僕 違う、僕の部屋だ！

僕と山本、立ち上がる。

山本 あ…、
僕 …あ、久しぶり。
山本 …あ、なんか、すみません、ノート、いつも…。
僕 あ、ううん…。あ、もうそんな時間…？あ、ちょっと待って、今起きたところだから。
山本 ああ…、いや、イイですよ、別に。なんか、みほがなんか、ええ。
僕 ああ、ううん。でもほら、延長料金発生しちゃうから。
山本 大丈夫ですよ、みほには内緒にしておきます。
僕 山本君…。
山本 僕はまだ実家があるからいいですけど、あれですよ、大変ですよ、自分の力で生きていくっていうのは。
僕 うん、まあね…。
山本 …だからいいですよ、ゆっくりして頂いて。
僕 山本君、君って奴は…
みほ 延長したんですか？一八七五円払って下さい。
僕 内緒にしてくれるって言ったじゃないか！

みほ 一八七五円。
僕 なんで一日延長しただけで一月分払わなきゃならないんですか！
山本 僕、みほには嘘付かないと決めているんです。
僕 それで他人には平気で嘘をつくのかい、最低だな君は。
山本 みほにだけ最高であればそれでいいんです。
みほ 気持ち悪いんだよお前。
山本 …え？
みほ あんたも早く帰りなさいよ。
山本 …え？
みほ 今私の時間なんだから。
山本 …え？
みほ 延長料金取るよ。
山本 …え？
吉田 これはひどい、この彼女さんが一番金に汚い。
みほ そいであなたは？
吉田 …。
みほ あなた。
吉田 …え、僕ですか？
みほ いつここに来てるの？
吉田 あれ…？僕書いてないのに…、
みほ あなたちゃんと来た時間を書かないとダメでしょ。そもそもどうやって入って来てるの？
吉田 いや、えーつとですね、
みほ いいから早く来た時間書いて。家賃は一分一秒から徴収しますので、一分月々三一・二五円、一秒だと…
星野 彼女さん、そんな人相手にしちゃダメですよ。
みほ え？
星野 それ山本君ですよ。
山本 何がですか？
吉田 僕がですか？
星野 君だろ？猿芝居はもうやめ給え。
山本 ウッキー。
みほ うるせえんだよバカ。
山本 …。
星野 これは連絡帳なんです。君の劇作ノートじゃない。ダメですよ、居ない人を書いちゃ。
吉田 …え、僕は、山本さんが書いた人物だと言うんですか？
みほ それ本当なの？
山本 そんな事して僕になんの得があるって言うんですか？
星野 あるじゃないか、架空の人物を作っておけば、その分自分の持ち時間を増やせるじゃないか。
僕 …なんだって！？
星野 君はそのうち、この人物をここに住まわせる気だろう。二人居るようにみせかけその実態は君一人。果ては人数を増やしこの部屋を乗っ取ろうという魂胆だな。
僕 山本君！
吉田 ちょっと待って下さい、僕は、僕ですから。
星野 いい加減にしろ山本、白状したまえ。
僕 山本！
山本 …さすがは星野さん、僕の負けです。
吉田 え、違うじゃないですか、なんでそんな事言うんですか？
僕 山本、貴様まだ言うか！
吉田 山本さん！
僕 お前が山本だろうがバカ！
山本 星野さんの言う通り僕はもう一人の自分を無意識に作っていた。本当の僕は人と話すのが苦手な根暗で知らない人にもホイホイついていくなんでそんなキャラじゃないんです。ましてや猿の真似なんか絶対しないインターネットもした事ない。
吉田 …星野さんが言ってるのはそういう事じゃないと思いますよ。
山本 僕の家は貧乏です。兄弟が六人居て僕は一番末っ子。テレビも好きな見られない。父と母を加えた八人家族の我が家はここよりもちょっとだけ広いオンボロ長屋に住んでいます。もう一人の僕はかっつけたい

だけの金と女にしか興味の無い最低な男で台本なんて書いた事無いし普通の作家よりも偉いんじゃないか
と思って劇作家って名乗ってたけどそれも大きな勘違いでした。

僕 山本、今夜待ってろ、ぶち殴ってやる。

星野 鬼頭君、彼は罪を認めているんだ。

僕 クソ…、ぶち殴ってやれたのに。

山本 …どうしてわかったんですか？

星野 臭いだよ。

山本 臭い？

星野 君の書いたページを開くとなんか変な臭いがするんだ。この人物の時にも同じ臭いがしたのさ。

僕 なんの臭いなんだ！

山本 …臭い。そうか臭いか。

吉田、自分の臭いを嗅いでみる。

星野 君もうベッドに入らないで、君が来てからだよ、変な臭いするなと思ったら。

僕 なんの臭いなんだ！

みほ あなた…、そんなにまでして自分の時間が欲しかったの？

山本 そうさ。だって僕の時間は二四時間のうちたった二時間しかない。ここに居るのは四人だから単純に割れば六時間なのにだ。僕はこの不公平に絶えられなかった。

僕 それは僕の台詞だ、ここは僕の部屋なんだぞ！

山本 山本は立ち上がる。

星野 待て、早まるな。

山本 うるさい！…もう僕はこの部屋には居られない。みほ、幸せにおなり。

みほ はい。

山本 …「はい」ってなんだ。

みほ はあ？

山本 …まあいい。僕は先に行く、こんな働くだけの世の中なんてまっぴらだ。疲れたよ、ゆっくり休ませて貰う。

みほ 山本は部屋から飛び降りた。

吉田 山本さん？！

星野 山本ー！

僕 …山本。

吉田 …道理で、家賃が安い訳だ…。

みほ、ティッシュで鼻をかむ。

星野 …彼女さん、どうしますか？まだここに居ますか？

みほ はい。

ティッシュを丸めて捨てた。

星野 …そうですか。

みほ じゃあ私が、ユウキの空いた二時間を借りますね。

星野 …え、ちょっと待って。僕もその時間が欲しいんだ。そしたら朝一〇時に帰って来れるから。

吉田 皆さん、正気ですか？人が一人死んだんですよ…。

みほ じゃあどうやって決めます？

星野 鬼頭君どう思う？というか鬼頭君借りる？

僕 え、何時？

星野 朝一〇時から十二時。

僕 そんな時間要らないよ。なんで夜九時に帰ってきて朝三時に出掛ける僕が、朝一〇時に帰ってきてすぐ十二時に出掛けなくちゃならないの？どういう生活スタイルなの。

星野 じゃあどうしよう？

みほ 私、一時間二千円払いますよ。

星野 …え？

みほ 二時間で四千元。このディズニーに入れますね。

星野 いや、ちょっと待って…、鬼頭君、どうする？

僕 なにが？

星野 値を上げるなんて、そんなの有りかい？

僕 どっちでもいいよ、僕は朝の一〇時十二時に興味は無いから。

星野 鬼頭ちゃん…。

みほ じゃあ決まりですね。

みほ、ディズニーにお金を入れた。

吉田 信じられない…。皆さん目を覚まして下さい、部屋はここだけじゃないんですよ。世界はもっと広いんです。

みほ うるせえなあお前、ちょっと黙ってろよ。

星野 山本君、もう帰ってイイよ。

吉田 まだ言うんですか？！僕は山本さんじゃありません、山本さんは、死んだんですよ！

みほ 今この部屋を借りているのは私達三人。単純計算で一人八時間。そのうち私は九時間持っています。これで星野さん、あなたに並びました。

星野 …いいよ、そういう事ならいいよやってやるよ。ここからはサバイバルだ。

吉田 …これはいけない。価格競争に乗ったら大変な事になりますよ。

僕 どうして僕だけ六時間なの…？

星野 鬼頭君、僕は今までなんの為に働いていたのかわからなかったがようやく見つけたよ、働く意味を。

僕 え？

星野 全ての時間を買い占めて、君達を追い出してやる。

僕 …ほ、星野君？

みほ …おう、やってみろよ。

星野 …やってやるよ。まず君を一番に追い出してやるからな。

僕 ねえ星野君、ここ僕の部屋…。

みほ 返り討ちにしてやるよ、来いよ。

吉田 喧嘩しちゃダメです。また時間があつという間に経っちゃいますから、ね。

星野 君はすぐそうやって暴力を振りかざすんだからやめてよね、財力で勝負なんだからね。

僕 ねえねえ星野君、ここ僕の部屋だよ…。

みほ お前の時間全部買い占めてやるからな。

星野 一つだけ教えておいてやる、今この部屋に居るのは三人じゃない、五人だ。

僕 …は？

みほ は？

吉田 え？

岩永、やってくる。

岩永 お邪魔します。

吉田 …隣の奥さんだ。

岩永 すいません、お言葉に甘えさせていただきます。

吉田、ノートをめくる。

僕、それを覗きこみ、

僕 …あ、

星野 十二時帰宅。さっき隣の奥さんに会ったよ。ちょうど廊下ですれ違ってね、手にコショウを持っていたからこれはもしかしてと思ったんだ。タバスコ、酢、ケチャップ、テンメンジャン、コショウと来たら次はきっと「ろ」だ、だから僕は思わず話を聞いてしまったんだ。

みほ 『ろ』で始まる、調味料ってなんですか？

星野 『ローヤルゼリー』に決まってるじゃないですか。

みほ それ調味料ですか？

星野 ろ…ろ…ろ…、

岩永 夜九時から十一時まで、月々二時間三七五〇円でしたよね。

僕 …ああ、えっと…、ああ。

岩永 この部屋は、人が何人も出入りしているのに一切話し声も聞こえない。おかしいなあとは思っていたんです。

僕 ああ、ああ、ええ…。

岩永 あ、迷惑なら、帰ります、けど…？
僕 あ、いや…、あ、はい、はい聞いてます…。
岩永 すいません。前はたまにだったんですけど、…うるさいですよ、すいません。
僕 あ、じゃあ僕は、そうか、はい、じゃあ、すいません、すぐ出ますんで。
岩永 …はい。
僕 あ、なんか、聞いてます？
岩永 ？
僕 えっとここに、連絡ノートがあるので、その日あった事とか、気付いた事などを書いておいて下さい。
岩永 あ、連絡ノート…？
僕 日記帳みたいに思えるかもしれませんが、連絡ノートなんで、ちゃんと目を通して頂くと、大事な情報が隠れてたりしますんで、わかると思います。
岩永 情報が隠れてる？
僕 あ、いや、すいません隠れてないです。普通に、読んで頂ければ、ええ。
岩永 わかりました…。
僕 えっとお、家賃と光熱費は、このディズニーに入れて下さい。
岩永 あ、ディズニー、はい。
僕 戸締まり、ちゃんとして下さい、…泥棒が入って来ますんで。
岩永 泥棒？
僕 じゃあ、ごゆっくり…。
岩永 はい。
僕 (どことなく声を掛ける)はい、じゃあ行きますよお。

僕、出て行く。かなこもついて行く。
隣の部屋から物を壊す音。

星野 ろ、ろ、ろ…
僕 星野君…、星野君ってばさ、コレどういう事？
星野 君が隣の奥さんを助けなきゃ、みたいな事を言うから、だから僕は、どうしたらいいかを考えてだね、…うん。あ、ローズヒップ、これならいいんじゃないか。
僕 ねえ判ってる？僕、朝の三時に家を出なきゃいけないんだよ…。
星野 判ってるよ。でも不定期だって言ったんだ、奥さん。
僕 全然規則正しいよ、毎日だよ、毎日夜九時から二時間。
星野 それは大変だ、
僕 そうだよ。
星野 奥さん。
僕 ああ、うん、まあ、奥さんはそりゃあ大変だけどね、
星野 可哀想に。
僕 ねえ誰か僕の心配はしてくれないのかい？僕は一体何時に寝たらいいの？
星野 好きな時に寝たらいいじゃないか。
僕 好きな時に寝られないから言ってんだい。
星野 でもね鬼頭君、これは人助けなんだ。
僕 …うん。
星野 奥さんの為なんだ。
僕 …う、うん、そうだね。
星野 どうか？そんな時間に外に居るなら、コンビニでバイトでも始めたら？
僕 なるほど、それは良いアイデアかもしれない。けど確実に身体壊すよ僕。
星野 そうなのかい。
僕 …どうしてなんだろう、この方法ならもう少し楽になると思ったのになんら変わりがない。

僕、振り返るとかなこが見ている。

僕 …そしてかなこさんはまだ僕から隠れているつもりなのだろうか。

僕、腰を下ろしかなこを横目で見ると、
かなこは立ったまま、空を見上げる。

僕 …もう思いっきり居るんだもん、ここに。これでも隠れているというなら僕はやっぱりどうしたらいいのかわからない。これは相当な精神力だ。見習わないといけない…。

僕、空を見上げる。
雨が降ってきた。

僕 かなこさんと外に居ると、必ず雨が降ってくる…。

岩永 これ、私も書いて良いんですか？

みほ あ、どうぞ。

岩永 夫は、普段はとでもイイ人なんです。お酒さえ飲まなければ、本当に。今年に入って、会社で、少しだけ出世して、少しだけ裕福になったら、少しだけお酒を飲むようになりました。帰りも遅くなるようになりました。たしなめると暴力を振るうようになりました。物を壊して、暴れるようになりました。そのうち疲れて眠ってしまつて、次の日には泣いて謝ります。その繰り返しです。

みほ それはもう別れた方が良いでしょうね。

岩永 お酒さえ飲まなければイイ人なんです。お酒が無くなればいいんです。

みほ お酒は無くなりませんし、そうやって甘やかすのもダメです。

岩永 夫は働いて、働いて、疲れているんです。働いて、働いて、疲れて、お酒を飲んで、働いて、身体を壊して、死ぬんです。だから少しくらい甘やかしても良いと思うんです。

みほ …ではしばらく実家に帰ったらどうですか？

岩永 実家は、もうありませんから。

星野 まあこういうのはね、周りがやいのやいの言ってもしょうがないんですわ。結局本人が気付くしかないんですな。

みほ なんか星野さん荒れてますね。

星野 荒れますよそりゃあ、眠たいんだから毎日。疲れて帰って来たらこんな重い内容のノート読んで。そら酒も飲みたくなるわ。

岩永 すいません、私やっぱり出て行きましょうか。

星野 あ、奥さんのせいじゃないです。

みほ 今のはひどいですよ。

星野 すいません。

山本、いつの間にか戻ってきていて、

山本 これはひどいですね。

みほ ナイーブな状況なんですから。

山本 ナイーブですよ。

星野 なんだ君達は、シャンプーか。揃いも揃ってバカ。僕はもう寝ますからね。

吉田 はっ、山本さんが戻ってきている…！

星野 明日もまたたくさん働かなくちゃならない。おやすみ。

岩永 皆さん、大変なんですね…。

みほ 大変なんですよ。

吉田 死んだと思ったじゃないですか…。

山本 あなただけです、僕の事を心配してくれるのは…。

吉田 どこ行ってたんですか？

山本 ちょっと旅に、ね。

吉田 あ、そうなんですか。

山本 まんが王国、という国に、ね。

吉田 …そういう国があるんですね。

山本 まあね。

みほ 何を一人で喋つとるんだお前は。

山本 みほ、僕は改心した。劇作家なんていう儲からない仕事は辞めてちゃんと働く。だからもう一度やり直してくれ。

吉田 僕は山本さんじゃありませんよ。

みほ お酒を飲むなとビシッと言いましょうか？第三者に言われると冷静になる事ありますから。

岩永 でも夫は暴れている事を反省はしているんです。

山本 みほ！

みほ 繰り返すという事は心から反省してる訳ではないでしょう。

岩永 はあ…。
吉田 暴力には暴力ですか？ダメですよ。
山本 また明日来るからね、外で、待ってるからね！
みほ この人は合気道をやっていました。
岩永 大丈夫でしょうか、夫は日々暴れていますから、相当強くなっているんだと思います。
吉田 どういう鍛え方なんですかそれは。
山本 あいや！でもどうして僕がそんな事？
みほ あなた何の為に合気道やってたの？
山本 身を守る為だ。
みほ 違うでしょ、守るべきモノを守る為でしょ？
山本 守るべきものを守る…？
みほ そうよ、あなたならやれる。
山本 (ややあって)あいや！見て、拳が速すぎて見えないだろ。
みほ 見えない事自体が見えないんだけど、さ、行って来なさい。
山本 あいや！ほら、見えない。
吉田 合気道ってそういうモノでした？
山本 あいや！
みほ さ、行って来なさい。
山本 あいや！
みほ さ、行って来なさい。
山本 あいや！
みほ 行きなさいよ！
山本 やー！
みほ 全然行かねえなコイツ…。

部長と僕、歩いている。

部長 それはもう結婚だね。
僕 何を仰るんですか。僕なんて、一人で生きるのもやっとなのに、無理ですよ。
部長 結婚すれば、男は変わるよ。もっと大きくなる。
僕 僕は今、住む家もまともありません。
部長 私だって借家だよ。
僕 そういう意味ではなくて…あの部長、どちらへ。
部長 君の家じゃないか。挨拶をしないとね。
僕 いや、ちょっと待って下さい。
部長 そうかそうか、やはり私の目に狂いは無かった。君とかなこさんは合うんじゃないかと思っていたんだ。
こっちなね。
僕 どうしてウチを？
部長 部下の住所くらい知らんでどうするんだい。ここか。
僕 あ、じゃあ呼んで来ます。ホント狭苦しい部屋なので。
部長 せっかく来たんだ。お茶くらい出し給え。
僕 いやあ…、
部長 さあさあ。
僕 はあ…。(ドアを開け)ただいま。
かなこ (台所の方から)お帰りなさい。
部長 本当だ。どれどれ？お邪魔しますよ。
僕 あ、部長さんを連れて来たんだ、覚えてるかい？お見合いの。
かなこ …。

かなこ、台所へ。

部長 …ん？どこに居るんだい？
僕 あ、今台所の方に、はい。
部長 …どうも、お久しぶりです。
かなこ …。
僕 人の気配がすると、すぐ台所の方に隠れるんです。

部長 ゴキブリみたいだね。うん、そうかいそうかい、いやあ、これは是非仲人を買って出ないとねえ、わはははは。

部長、座る。

星野 うん、そういういきさつでここに来たのは読めば判るんだ。僕が知りたいのは、どうしてこの人は帰らないのかって事でね。

僕 それは僕にはわからない。部長に聞いてくれないか。

星野 聞いてはいるんだよ、何度も。

部長 ここはなんですか？共同で生活しているんですか。

星野 あ、ええ…。

部長 しかも時間でねえ。なるほど面白いシステムですなあ。

星野 …今日は、お仕事は？

部長 有給を貰ってね、しばらくのんびり出来そうなんです。あははは。ストレスですなあ、それは。

岩永 そうみたいですわね。

部長 スポーツはされないんですか？

岩永 休みの日はほとんど寝てますから。

部長 ジョギングでも始めたら如何ですか？奥さんも一緒に。

岩永 ジョギングですか。

部長 そうだ、私も、一緒に走りましょうか？

岩永 え？

部長 運動不足でね、いかなあとは思っておったんです。おかえり。

僕 …ただいま、帰りました。

部長 寒いねえ今日は。

僕 …ええ。

部長 あいたたた、寒くなってくると、関節がね、痛いんですよ。ははは。

僕 …あれ？かなこさんは？

部長 んー？

僕 かなこさん？…かなこさん？(ベッドの下などを見るが)居ない…。

部長 (新聞を読んでいる)今年もドラゴンズ、優勝かな。こうも当たり前優勝するようになると、逆につまらな
いねえ。おやおや、こんな時間までお仕事ですか。

みほ ？！…あ、はい。

部長 何をされてるんですか？

みほ あ、スーパーの、二四時間なんで…、

部長 イオン？

みほ いや、イオンじゃないんですけど…。

部長 朝は、何時に出られるんですか？

みほ あ、屋からなんで…、

部長 そうですかそうですか。

みほ 鬼頭さん、なんですかこの人。困るんですよ、勝手に知らない人をあげて貰っては、あなただけの部屋
じゃないんですから。

僕 …すいません。でもそれは、僕がずっと言い続けてきた事でありまして。

吉田 この人、どうして帰らないんだろう…？

みほ ここはあなたの部屋であってあなたの部屋ではない。というかもうあなたの部屋という考え方は捨てて下
さい。

僕 僕の部屋なのに…わ！山本君。

山本が僕の時間帯に部屋に居る。

山本 すいません、お邪魔してます…。

僕 …え、君何やってるの？

部長 彼はずっと居たよ。

山本 …僕の部屋が無いんです、みほに追い出されてしまったので…。

僕 うん…。

皆、吉田の読んでいるノートを覗きこみ、

星野 「みほ、僕ね、就職決まったよ。ネジ工場で八時間ずっとネジを見ている仕事だ。来月になれば給料が貰える。そしたら僕は君の時間を借りる。また一緒に…」
部長 そんなノートでやりとりしてないで、みんなで一緒にどこかに行ったらいいじゃないですか。
星野 …じゃあすみません、おやすみなさい。
部長 なんだか思春期の子供みたいですな。ははは。
星野 …(いびきをかく)。
部長 おやすみなさい。
星野 あ、おやすみなさい。
部長 寒くなってくると、関節がね、痛いんですよ。夜の倉庫作業は、寒いでしょう？夜通しでしょ？大変ですなあ。
星野 お出かけしたらどうですか？今日天気イイですよ。
部長 紅葉もキレイに染まって来ましたかな。
星野 ああ、そうですよ、キレイですよ。
部長 紅葉を見に行こうよう、ははは。
星野 …鬼頭君。
部長 レッツゴー！行こうよう！ははは。
星野 …鬼頭君！

星野、頭を抱える。

岩永 「もう僕は眠くて眠くてたまらないんだ。誰かこの人を追い出して下さい。一生のお願いです。」
部長 紅葉を見に行こうよう、ははは。
僕 …ははは。「でも良い方ですよ、部長さんは。」
部長 レッツゴー！行こうよう！ははは。

みほ、部屋の隅の方で体操座りをして部長を睨んでいる。

みほ 「…そうなんですか？」
星野 「ジョギング、一緒に行って下さって。久しぶりに太陽の光を浴びたと喜んでおりました。」
岩永 夫のあんなさわやかな笑顔、久しぶりに見ました私。
部長 それは良かった。いやいや、なかなかの好青年でしたよ。
吉田 隣から、誰かが何かを壊す音が聞こえる。
部長 ん？
岩永 汗をかいたらビールが美味しいんだそうです。
部長 …。
岩永 飲んでます。
部長 しょうがない男ですなあ…(立ち上がろうとするが)あいたたた、
岩永 大丈夫ですか？

部長、包帯を足に巻きながら。

部長 いやいや、暴れるのも無理なくらいね、倒れるまで走ってやろうと思ったんですが、私の方が先にこの通りの有様です。ははは。
僕 病院行きました？
部長 いやいや、大した事ないですよ。しばらく安静にしておけばね、失礼。

部長、星野の隣で横になる。

星野 鬼頭くーん…！
僕 …一人で歩けない感じですか？
部長 そんな事もないんですがね、アキラスかなあ、まともに歩けんのですわ。
僕 はあ…。
部長 アキラス臆かなあ。
吉田 …帰らない気だ。

かなこ、帰ってくる。
ほっとする僕。
かなこの手にはクリスマスツリーがあり、それを部屋に飾る。

みほ 私の時間借りてもしょうがないじゃないの、屋間の仕事なんでしょ？だったら夜借りなきゃ。
星野 「夜？え、何時？」
岩永 「七時から九時じゃないの。」
山本 「そんな時間に借りても君に会えないじゃないか。」
僕 「何を甘い事言っとるんだ貴様。」
みほ そう簡単に会えると思ったら大間違いなんだよ。一番遠くの時間から攻めて来い。
星野 攻めるって言われても…、
部長 あーもう、こんな季節ですか。一年、あつという間でしたなあ。
岩永 「今、山本君は僕の時間にやってきてノートを書いているんですね。僕の時間には、僕を含め四人の人間が居るんです。これどうにかならないでしょうか。」
山本 誰か僕に時間を譲って下さい。
吉田 四人？…ああ、かなこさんも居るのか。どういう関係なんだこの二人。
僕 三畳に四人です…。かなこさんは基本台所から出てこないけど。
みほ ユウキ、まずこのおじさんをなんとかして！
山本 出てって貰えませんか？
部長 いやあ、私もね、こんな身体じゃなかったら、すぐに出て行くんだけどねえ、ははは。アキラスかなあ。
山本 せめてみほの時間は出てって下さい。おじさん、家あるんですよね？
部長 ああ、あのお嬢さん？あの子は、来て、そのノートに何やら書いて、すぐ帰っちゃいますよ。
山本 …え？
みほ 「七時九時、あんた幾ら出せる？」
星野 七時から九時は僕の時間じゃないか。あげないよ。
岩永 「二時間月々幾ら出せるの？」なんか私、ここに居て大丈夫でしょうか？
吉田 ちょっと、またそういう事言って、いい加減にしないとダメですよ。
山本 まだわからないけど、給料は手取りで一〇万くらいだと思うんだ…。
僕 「じゃあ一万ね。」
星野 「二時間で一万？それはちょっと…」
みほ 一時間一万だよ。
岩永 「一時間？！」
山本 それは無理だ。
僕 「七時九時はゴールデンタイムなんだからそれくらい払わなきゃ。」
みほ 「ちょっと君！値を上げたらイイってもんじゃないだろう。」
吉田 ここの家賃は四五〇〇〇円ですよー。
星野 山本君、彼女さんの近くがイイなら一時三時だよ。
岩永 「一時三時、それがイイです！」
山本 僕、一時から三時にします！
僕 バカじゃないの？それ僕。僕の時間。
みほ 幾ら出せるの？
星野 「うーん、五〇〇〇。」
吉田 家賃は四五〇〇〇円ですよ！
岩永 「じゃあいいよ、ディズニーに入れといて。」
山本 やった！
僕 バカか。いいですか皆さん、僕は、夜十一時に帰って来て、朝三時に出るんです。四時間しか家に居ない。その上山本君が一時から使うってなったら、僕は一体何しにこの家に帰って来るんですか？

僕、その場に横になる。
かなこ、それを見て、ゆっくりとノートに書き込む。

みほ 鬼頭さん、倒れました。…(かなこを見て)あなたが書いたの？

かなこ、台所へ行き、濡れ雑巾を持って来て、僕の顔にベチャッと乗せる。というか落とす。
僕「ぶはっ！」と飛び起きて、みほを見る。

僕 …あ！あー、もうこんな時間！あー一瞬目をつぶっただけだと思ったのにちくしょー！延長料金が！延長料金があー！

僕、走って出て行く。

かなこ おやすみなさい。
みほ …おやすみ。

かなこも出て行く。

吉田 皆さん、僕の部屋にはノートがたくさんありました。それも、あと一冊になりました。わかりますか？もうすぐ終わるんです。どういう終わり方をするのかわかりませんが、この生活にも終わりが来ます。僕は最後のページを開けば済むのですが、それはしないでおきます。

みほ 「これは、皆さんがここに居た、という記録です。それを読んでいる人がいる。この部屋は皆さんが居なくなってもまだここにあるんです。」

みほ、出て行く。

星野 「そして僕がやってくる。時間は、そういうものなんです。その中の限られたほんの一瞬を僕等は生きていて、それはこの手にとどめておくことは出来ない。」

星野、出て行く。

岩永 「この記録は本当にあった事なのかそうじゃないのかわかりません。誰かの創作かもしれません。この中には劇作家が居りましたが彼にはそんな才能は無いようなので違うかもしれません。」

岩永、出て行く。

山本 「この記録はそんな考えなどどうでもいいくらいどっちでもいい内容で、それを読んでしまった僕もどっちでもいい存在で、僕等はそんなどっちでもいい事で構成されている、なんとも不可解な生き物なのです。」

山本、出て行く。
部屋には吉田と部長だけ。
部長、起きてきて、トイレに行き、水を飲み、

部長 なんだか難しすぎて私にはさっぱりわからないのですが。みんな一緒に住んだらいいじゃないですか。ルームシェアってそういうものでしょ？一人で暮らすには厳しすぎる世の中を、一緒に乗り越えていきましょうよ。さし当たりクリスマスを過ごしたらいいじゃないかと思うんです。いかがですか、私なんかはバカですからすいません、こんな事しか言えなくて。

吉田 いや、はい、そういう事ですね。

僕とかなこ、帰って来た。
僕、買い物袋を提げている。

部長 お帰り。
僕 …ただいま。

僕、テーブルに袋を置いて、

僕 部長、会社辞めたんですね。

部長 あ、聞いた？

僕 …どうするんですかこれから。

部長 いやあ、足がね、

僕 そんなにですか…？

部長 アキラスがねえ。

僕 十二月二四日、十一時帰宅、一時出発。

僕、デイズニーにお金を入れようと財布を出すのが面倒臭い。

僕 あーもお、(適当にジャラジャラと入れ)一時ちよい前に起こして下さい…(机に突っ伏する)。

部長、僕の肩をトントンと叩く。
がぱっと起き上がり、

僕 はっ、もうそんな時間?!一瞬目を瞑っただけだったのに!

僕、立ち上がる。

部長 違うよ。

僕 …へ?

部長 明日は、というかあと一時間もしたら、君の誕生日だろう?

僕 …あ、もうそんなのですか?

吉田 …十二月二五日なんだ。クリスマスか。

僕 もういいですよ誕生日とか…、

部長 幾つになったんだい?

僕 …三十…、よくわかんないです。おやすみなさい(突っ伏す)。

部長 時間だよ。

僕 え!?今一瞬目を閉じただけなのに…、あー。

僕、フラフラと出掛けていった。

部長、大きな紙袋に包まれた何かを部屋の隅にそっと置いた。

かなこは台所からやってきて、机の上で枝豆を剥く。

部長 彼は、あれですか、こんな時間に外に行って、何をしているんですか?

かなこ、ノートに目を向ける。

部長 (ノートをのぞき込み)カプセルホテルに、マンガ喫茶…、なるほど。「お誕生日おめでとう」(と書き込む)。

山本、やってくる。

部長 やあ、お疲れ様。

山本 お疲れ様です…。

部長、出て行く。

山本、大きな紙袋に気づいて、

山本 …ん?

袋を開ける。と大きなぬいぐるみが入っている。

山本 …?(ノートを読み返す)ああ、誕生日なんだ。でもこれ…?

吉田 「一時帰宅、三時出発。みほへ、今日はクリスマスです。プレゼントを置いておきます。気に入って貰えるかどうか。」

山本、自分の買ってきた小箱を見てやや考える。

吉田 「みほへ、ベッドに置いておきましたよ。机の下のは部長さんから鬼頭さんへの誕生日プレゼントみたいです。」

ぬいぐるみをベッドに置き、自分の買って来たプレゼントを紙袋に入れ机の下に。

山本 鬼頭さん、おめでとう。わ！（かなこに気付く）びっくりした…、え、ずっと居ました？

かなこ、黙々と枝豆を剥いている。

山本 枝豆…。もう行かなきゃ。

山本、出て行く。外で遠くからみほを見てから去る。
吉田、部屋の隅に置いてあるクリスマスツリーを見つける。

吉田 …ん？…んー？！

吉田、新聞を見つけて日付を見る。

吉田 これ思ったより過去じゃない…。え？三日前？！…え？

吉田、過去のノートも開き何度も確認する。
みほ、帰ってくる。

みほ …あれ？おじさんは？

かなこ、首をかしげる。

みほ 枝豆？こんな季節に。（ノートに書く）三時帰宅。あんた誰なの？ユウキじゃないの？もしもし！

吉田 あ…、僕ですか？

みほ 僕です。

吉田 吉田さとして…。ってあの、これどうなってるんですか？僕書いてないのに、その…、

みほ ああ、誕生日なんだ…。クリスマスか。（ノートを読んで、ベッドの上のぬいぐるみを見る）相変わらず最低のセンスだな。

みほ、袋から「山本のプレゼント」を取り出し、ぬいぐるみを袋に入れる。

みほ 名前はいいんだよ。何者かって聞いてんの。

吉田 あ、学生やってまして、

みほ むかつくわあ。このなんでも判ってますみたい言い方とか頭良いんですみたいなそいで結局あんたが住むっておい吉田、なんかあんたの勝ちみたいでむかつくわ。

吉田 僕、もうここに住んで半年なんです。大掃除しようと思って押入れ片づけてたらノートが出て来まして、その、あ、このノート読み始めてもう二時間くらいですかね、そんなに経ってないか、その証拠にほら、僕の書き込み、皆さんのどの時間帯にもあるでしょ？そこに返事が返ってくるって言うのが不思議でたまらないんですけど、うんと、今だってもうリアルタイムで会話してますからね、今日が二八日ですから、

みほ 吉田～、難しいんだよお前。何ごちゃごちゃ言ってんだよ。はよ金払え。

吉田 …払ってますよ毎月、僕はディズニーじゃなくてちゃんと…

吉田、ディズニーの缶を見つけ、

吉田 ディズニーがある！？

みほ 変なおっさんおらんで久しぶりに寝れた。十二時家を出る。誕生日おめでとう。

みほ、「山本のプレゼント」を持って出て行く。
入れ替わりに星野がやってきて、ノートを読む。

吉田 あのおすいません、僕の居る、今が二八日で、皆さんが二五日だとすると、…そうなると、…どういう事ですか？

星野 もおね、最近今日が何日とかよくわからないんだよ。

吉田 あ、星野さん。

星野 自分の年もよくわからないんだから…。鬼頭君、幾つになった？おめでとう。十二時帰宅。

吉田 …十二月二五日。…明日が二六日、明後日が二七日、

星野（袋を開けて）こんなの鬼頭君要らないよ。

星野、ぬいぐるみを出し、ポケットティッシュを紙袋に入れる。
かなこ、枝豆を剥いている。

星野 枝豆だ…。こんなの食べたら鬼頭君死んじゃうんじゃない？皆さん、正月はどうされるんですか？

星野、ぬいぐるみを持って出ていく。
岩永やってくる。

岩永 はい、醤油とバター。
かなこ ありがとう。

岩永、ノートに書き込む。

吉田 「九時に来ました。奥さんが…、」
岩永 奥さん？…ああ、奥さんじゃないか。
吉田 「醤油とバターは私からです。」
岩永（見回し）部長さんは？

かなこ、首をかしげる。

岩永 そう…。夫がお酒を止めると言っているの、私はもうここには来なくてもいいかもしれないの。だから、私のこの時間、部長さんに貸してあげようかと思ってたんだけど、…居ないんじゃないかね。
吉田 「誰か私のこの時間、要りませんか？一番高く借りてくれる人に貸します。」…もうとんだシステムになっている。

岩永、出て行く。
僕、帰ってくる。

僕 ただいま。
かなこ お帰りなさい。

僕、ノートに手を伸ばして、枝豆に気付く。

僕 …枝豆。

かなこ、丼一杯の枝豆にローソクを立てる。

僕 え、誕生日の？

かなこ、ローソクを立てている。

僕 いいよ、このままで。ローソク立たない、三六本も。

かなこ、丼を僕の方へ。醤油とバターも。

僕 …僕はね、本当に枝豆が好きでね。そうか、ノートを読んだのかい？この話、誰かにした気がする。

かなこ、また枝豆を剥く。
僕、枝豆にしょうゆとバターを乗せて、

僕 頂きます。

吉田 「今日、かなこさんが誕生日に枝豆を剥いてくれた。死ぬ前に食べようと思ってたけど、僕はまだ死なない。部長、ポケットティッシュありがとう。みんなも、ありがとう。僕は三六歳になりました。…十二月二六日、一時帰宅、三時出発。みほ、気に入って貰えましたか？あのぬいぐるみは大きいから高かった。僕はこれか

らもっと働く。たくさんネジを見ていく。頑張ります。」

山本、やってきて、ノートを書く。

吉田 「三時、帰って来る。食器は使った人が洗うように。」

みほ、やってきて、ノートを書く。

吉田 「岩永さん、夜の九時から十一時までは私要りません。あと星野さん、正月の話ですが、私は休みはありません。年中無休なので。どこか行くならどうぞ。私はその時間借りますよ。」

星野、やってきて、ノートを書く。

吉田 「十二時帰宅。いや、聞いただけです。僕も休みはありません。正月だからとか、もう関係ないですから。君には負けません。岩永さん、僕借ります。一時間五〇〇〇円でいいですか？」

岩永、やってきて、ノートを書く。

吉田 「一時間五〇〇〇円、はい、あと無いですか？彼女さん、このままだと星野さんの持ち時間十一時間になりまして、負けちゃいますよ。」…あなた、そういうキャラだったんですか？

山本 十二月二七日、一時帰宅。三時出発。

吉田 …あれ？鬼頭さんは？

山本 みほ、みほ、みほ、みほ、

みほ うるせえよ。山本、お前借りろ。九時から十一時。私は仕事だから。十二時家を出る。

星野 僕借ります、一時間六〇〇〇円払います。夜九時家を出る。ねえ鬼頭君？…鬼頭君、居る？

岩永 はい、六〇〇〇円来た。他無いですか？他。

僕、丼一杯の枝豆を食べ終えて、

僕 もう時間だ、行かなきゃ。

僕、食器を片付けに台所へ。

吉田 もうすぐ十二月二八日です。まだ鬼頭さんの書き込みはありません。これをめくると、今日になってしまいます。この先は、白紙ですか？…白紙は白紙で怖いんです。…書いてあっても怖いんです。僕は、どうしたらいいですか…？

かなこ、ノートをめくる。

山本 十二月二八日、一時帰宅三時出発。もう今年も終わりですね。よいお年を。(去る)

みほ 三時帰宅、正月とか今更関係ないですから。いつもより忙しいってだけです。十二時家を出る。(去る)

星野 十二時帰宅。鬼頭君…？ねえ、鬼頭君、大丈夫？九時出発。(去る)

岩永 九時に来ました。今年はキリが悪いので、来年からこの時間は星野さんにお貸しますね。一時間七〇〇〇円です。(去る)

かなこ、立ち上がる。

その瞬間、吉田、かなこと目が合う。

吉田 …！

かなこ …。

吉田 …あ、あの、

かなこ はい。

吉田 あ、みほさん、ですか？

かなこ え？

吉田 …あ、…かなこ、さん？

かなこ はい。

吉田 あ、あの…、僕ずっと、ノート読んでました。この…、

吉田、ノートを持ち、ページをめくると、

吉田 !!…と、書いてある…。

僕、荷物を抱えて台所からやってきた。

僕 結局、タバスコや酢はどこに行っちゃったんだろうね、

僕、吉田と目が合う。

吉田 !…鬼頭さん？

僕 ……はあー、また知らない人が増えた。

吉田 あ、あの僕、

僕 うん、いいよ。それは僕に聞かなくても、

「全部ここに書いてありますから。」

吉田、ページをめくる。

「こうやって誰も知らない人が入ってきて、持って行っちゃうんだなきつと。」

吉田 …あの僕、ちょっとわからないんですけど、…と言っているこれも書いてあるんですけど…？

「この部屋には今、何人居るかわからないな。」

吉田 僕はですね、普通に家賃を払ってるんです、四五〇〇〇円。

「何時間？」

吉田 二四時間に決まってるじゃないですか、だってここは僕の部屋なんですから。

「僕もよくそう言ってたんだ。」

吉田 …僕は今、誰と話してるんだ？

かなこ もうすぐ大みそかですね。

吉田 え？

「今年も早かった。知ってるかい？枝豆を植えると枝豆が生えるんですよ。だから枝豆は、種なんですよ。」

かなこ 食べられる種の事を豆と言うんですよね。

「あ、知ってた？」

かなこ それは星野さんの言い分ですね。

「よく考えたらわからない話なんだ。だってひまわりの種は、あれはなんだい？」

かなこ あれは種ですよ。だって植えたらひまわりが生えて来ますから。

「でも食べられる。」

僕とかなこ、会話なのかかなこの独り言なのかかわからない状態で部屋から出ていく。

かなこ ということは、ひまわりの「豆」ですね。

「そういう事なんだね。」

かなこ アーモンドは？

「アーモンドは、アーモンドだろう。だってアーモンドを植えてもアーモンドは生えて来ない。」

かなこ じゃあ柿の種は？

「それは食べられる柿の種かい？だとしたらそれはお菓子だろう。食べられない柿の種なら、それは種だろう。」

かなこ ごまは？

吉田、ノートを机に置いて、しばらくボーっとしている。

「ごまは、ごまだろう。」

「そおか。」

「君、小さくて食べられる物はみんな豆だと思ってるんじゃないのかい？」

かなこ 僕、空を見上げると雨が降ってきたようで、傘をさす。

二人一緒に去っていく。

「じゃあごまは、なんですか？」

「ごまは…、」

「ごまは？」

「おい、ごまの話になっちゃったじゃないか。」

「ああ…。」

吉田、立ち上がり、部屋を見回す。

とりあえず枕の匂いを嗅いでみる。

次に財布から小銭を取り出し、頭を掻きながら出て行った。

部屋には誰も居ない。

ノートがめくれた。

～終～

【配役】 僕・鬼頭洋一 …田内康介
星野 …古川聖二・平塚直隆(Wキャスト)
山本ユウキ …二瓶翔輔
部長 …高瀬英竹
佐伯かなこ …空沢しんか(フリー)
隣の奥さん・岩永 …河村梓
山本の彼女・みほ …山田マキオ
吉田さとし …今津知也(オレンヂスタ)

【上演記録】 2012年4月27日～30日 於・七ツ寺共同スタジオ
作・演出／平塚直隆・舞台監督／柴田頼克・照明／

今津知也

は、作者である平塚直隆にのみ帰属するものです。

この戯曲の著作権

上演許可あるいは

その他のお問い合わせは、作者の所属する「オイスターズ」どうぞ。

- **オイスターズ ■**

ホームページ

http://www.geocities.jp/theatrical_unit_oysters/

メールアドレス

theatrical_unit_oysters@yahoo.co.jp